六五　森春濤

苦作の名字

森春濤が、往年、新潟に游んだ時、鈴木柳塘といふ畫師が、一日春濤の旅宿を訪うた。居室に通して來意を問ふと、どうか、先生から、名と字を選んで貰ひたいと云ふ。春濤は、初對面だから、其人の性行も解らず、どんな名字が適するやら、選擇に苦んだが、辭することも出來かね、試みに、君の通稱は何と云ふかと問ふと、柳塘云ふには、私は通稱を苦作と申します。まことにトボケた俗な名で、御話になりませんと云ふ。春濤之を聞き、『なに苦作。そりや面白い。仁とか義とかいふと、人も普通用ゐるから、同名の者がいくらも出來る。苦作は變つてゐる。名は苦、字は子編が善からう。なに出處が聞きたい……出處は百人首の、天智天皇の御詠さ……秋の田のかり穂の庵

の苫をあらみ……「あらみ」は「あみ」で、「ら」の字は助字だと云ふ説もあるから（と都合のよい解釋をつけて）字を編としたのだ。「秋の田」とあるから、號を「秋田」と云ふも妙だな。又「かり穂の庵」から「穂庵」とするのもよからう』と、一首の歌から、湧くが如くに種々の案が出るので、柳塘も、流石に春濤は大詩人たるに愧ぢぬと感服し、其日は喜んで辭し去つたが、數日を經て、自畫の扇子を携へて再び訪ひ來り、前日のお禮に拙畫を獻ずると云うて差出したのを見ると、款識の下に、「苫字子編」の印が鮮かに捺されてあつた。

藝苑一夕話 上卷 終

大正十一年四月八日印刷
大正十一年四月十一日發行

藝苑一夕話上下
各一冊正價金貳圓參拾錢

不許複製

著者　東京市牛込區東五軒町三五　市島謙吉

發行者　東京市牛込區辨天町一五七　種村宗八

印刷者　東京市牛込區榎町七　渡邊八太郎

發行所　東京市牛込區早稲田
振替東京一一二三番　早稲田大學出版部

〔日清印刷株式會社印刷〕

賣捌所

東京神田　東京堂
東京日本橋　至誠堂
東京京橋　北隆館
東京京橋　東海堂
大阪東區　盛文館
名古屋市　星野書店

其他各地書舗